



## 授講者と受講者の間 — 学生による授業評価を見て

おお み げん どう  
巨 海 玄 道

16年度前期の授業を終えてほっとしていたら、いつのまにか11月となり、おまけに今年からと言うクォーター制度の講義をやれと言うお達しに学会や研究会で出張の多いこの時期を青息吐息となりつつも何とか休講なしで終えることができた。いつものように「講義が分かりやすかったか」、「板書は適当であったか」、「話す内容が自己満足になっていなかったか」、等等...講義室からの自分の部屋に帰る道すがら、沢山の学生でごった返す中庭を横切りつつ、自問自答する。時には赤面するような失敗講義をやり、自責の念に駆られ、忸怩たる気分になるときがある。わかりやすい講義を目指していない教員などいるはずはない。みなそれなりに工夫をして日々の講義に臨んでいると思うが講義をする（「授講」する）方は「受講」する学生と同様、多様であり、講義の仕方は基本的には教員のキャラクターにある。口べたな教員もいれば、いい講義内容でも声が通らず結果として下手な講義となってしまうこともある。どのような講義が良いのかは対象となる学生のレベルとその学生あるいはその学科の要求するもので異なってくる。

今年度私の場合は未履修（高校で物理を全く習っていない学生）のクラスという大学の教員になって初めての経験であった<sup>1)</sup>。それなりに覚悟はし、目に見える授業を目指し、周到な準備をし、手づくりの教材を用意した。問題はそれが学生にどう響いたかであった。授業評価（以下「評価」と略）を見るのが楽しみであったが以下のようなものが結果としてでてきた。少々

がっかりした。しかしよく考えてみると世の中こちらの思惑どおりにことが運ぶとは限らない。いくらこちらが思っても向こうは又別の見方をする場合が多い。そう思うとなんだか救われた気分になるのだがやはりどこか空しい。どんな講義も授講者にとってもまた受講者にとっても完全に満足のいくものはなく（たまたま全く満足し自分だけ悦に入っている教員があるがこれは例外としよう）一長一短がある。膨大な評価の集計を見てそんな感想を持つ。評価の細かいことは限られた紙面では無理なのでここでは私が担当した未履修クラスに限って受講する側と授講する側からの見方の違いを述べてみたい。

「力学は数学を持って記述される」という観点に立ち、基礎的な数学をベースとした、講義をしたあと、力学の講義をするという方針を取った。13回の講義のうち、はじめにベクトルと微分方程式の初歩を4回に分けて講義した。演習や宿題、小テストなども課した。講義は多くの簡単な演習実験を取り上げた。例えば

- 1) 慣性の法則の理解には達磨落としを使った（学生には実演してもらった）。
- 2) 力積の理解にはスーパーボール（又はガラスコップ）を机の上や座布団の上で跳ね返らせてその違いを考えることによって理解に努めた。

等とできる限りで視覚に訴えなおかつ身近な材料を使った。しかし前半の4回の講義は難行した。当方はここ40年間、毎日お目にかかっている微分積分やベクトルも学生にはわからない人が多かったようである。土

項 目	担当クラス	平均 値	最小 - 最大値
E 1 授業内容が今後につながるものだった	23%	21%	5 - 43%
E 4 授業の準備が周到になされていた	30	13	3 - 30
E 8 教師に教育者としての熱意を感じた	45	18	3 - 45
F 4 授業内容をもっとやさしくしてほしい	28	44	16 - 72
F 6 授業の進行をゆっくりしてほしい	23	43	22 - 80
F 7 理解度を把握して授業を進めてほしい	38	49	28 - 74
F 8 理解できるように説明に工夫が欲しい	30	42	21 - 63
F 13 声が届くようにしてほしい	4	11	0 - 50
F 14 板書を読みやすくしてほしい	2	27	2 - 67

曜日に補講をし、オフィスアワーをもうけても全学生の理解を得ることは出来なかったようである。これに対する評価結果を他の教員による力学基礎に対する結果を引用しつつ以下の項目に限って紹介する。

F 4 - 8 は予想されたことであるが未履修、既履修に限らず講義はもっと分かりやすくせよと言うことである。ただ教員によるばらつきも多くまさに教員の個性がでていいると思われる。F 13 - 14 は「講義は全学生に聞こえなおかつ、板書は後からも必ず見えるように書く」と言うあらゆる講義・講演の基本に対する評価結果であるがこれも教員によるばらつきが多い。評価が厳しかった教員には学者として高く評価されている人も多く、そのことと授講者としての評価は必ずしも一致しないと言うことで今後の研鑽を期待したい。E 1 で私の評価は低かった。対象とした学生にとって力学が人間の創成した文化の典型的なものであるという考えは浸透せず、力学の本質を旨く説明できなかったことになる。E 8 は教師冥利に尽きることであり受講した学生には感謝したい。但し物理関連科目の中にはこの項目で70%を越える講義もあった。

しかし、記述式のアンケートの中身は刺激的なものが多かった。例として、授業中に具体的な演習をやって欲しい。教科書の問題の答が欲しい。レポート提出をさせておいてそれについて解答・解説を行わないのは一体何を考えているのか。教科書は難解な書き方がされていて授業でわからないのに予習復習など出来たものではない。そのくせレポートがありふざけている、等等など多々あった。どうしても進捗の関係でとばさざるを得ない章があり、当方も辛いところであった。またレポートの講評もやるべきであろうがこれもやはり、進捗の関係で出来ないこともあった。この指摘を今後の課題としたい。ただ残念だったことは私としてはそれなりに工夫して演示実験等もやったのだがそれに関する感想はなにもなかったことである。講義の前の日は忙しい中おもちゃ屋に行ったり、八百屋に行ったりして教材を集めたがそれに対する評価はなかった。しかしこれも授講する側の勝手な論理かもしれない。

この他、私のクラス以外で多かった項目として、マイクを使わないので声が全然聞こえない。90分ひたすら板書しながら黒板に向かってしゃべるので声も聞こえないし、生徒はただ写すだけになっている。生徒がどれくらい理解しているか把握しながらやらないと先に進んでも無理。字が汚くて読めなかった。もっ

と丁寧に書いて欲しかった。また黒板を消すのが早すぎる。自分勝手に進めて授業がわかりにくすぎる。先生が当たり前と思っていることが生徒のはわかっていない場合が多い。もっと良い教科書を使って欲しい。教科書がわかりにくい、等があった。

数年前のことだったかある学会で一般教育の現状についてのいくつかの報告の中に以下のような興味ある現状報告がなされた<sup>2)</sup>。(括弧内は私の勝手な解釈)

(1)「教える中身さえよければ学生の学力と学習意欲を向上させると単純に言えなくなった」(いくら教科書がよくても学生のレベルと乖離しては効果が上がらない)

(2)「学生の実態を見て真に学生の学力と学習意欲を向上させうる教育内容と教育方法を探求することが必要となった」(学生のレベルに教員は目線を下げよ)

上で述べた記述式の評価結果( - )はまさにこのことを反映している。「目線を下げる」ことは難しいことであるが学生のレベルにあった教科書とそれに付随する教育方法...口で言うのはやさしいがこれもまたなかなか困難なことである。そして更に重要なのは学生の実態を探ることである。現在本学の学生の試験前を除く1日の平均的な学習時間は1時間以下というのが70%である。このような中で殆どの学生が1週間10科目を越える科目を履修し、更に予習復習もするというのは殆ど不可能に近い。「時間内に理解可能な講義」が必要とされるが独法化後、教員はうなぎ登りに増える際限ない学内外の仕事の中で果たしてそれが可能なのか、定年までに後数年を残した自分には hard task として重くのしかかってくる。(理学研究院)参考文献

- 1) 篠崎ら, 第53回九州地区大学一般教育研究協議会議事録(授講者から見た報告)
- 2) 押川元重, 第47回九州地区大学一般教育研究協議会議事録, p10.

19頁から23頁の「学生による授業評価」特集はいかがでしたでしょうか。今回の記事, 又は, 授業評価全般に関する意見・感想がございましたら下記のメールアドレスまで御寄せください。

rdche@mail.rche.kyushu-u.ac.jp

高等教育総合開発研究センター  
担当 淵田吉男